

梵灯庵年中日發句

其月
一写

伊也知文庫

文庫20

E2

85

80

75

70

65

60



伊地知氏書

正月一回教句 應永十九年九月

廿五日

梵燈 菴主



一日若氷みうりて 冬 春
 二日末さし 梅乃風
 三日月ありて 初 乃風
 四日下やま 梅乃風
 五日こ乃 柳乃風
 六日梅乃 柳乃風
 七日梅乃 柳乃風
 八日梅乃 柳乃風
 九日梅乃 柳乃風
 十日月ありて 初 乃風

昔松風を春日くみらり乃雪を海東那
土日暮柳ももゆふ木ありは極成指の
昔の春の雨ハ飲来風乃行末か那
昔梅ははり物あはるる記のあひあ
昔の月もしつれ梅ももるる記のあひあ
昔の山を雪におおはるる朝のやり
昔の春やうも記のあひあ
昔の松もりし月乃雪のあひあ
昔の柳もりし月乃雪のあひあ
昔の雪ももるる記のあひあ

昔梅ももるる記のあひあ
昔の春ももるる記のあひあ
昔の月ももるる記のあひあ
昔の山ももるる記のあひあ
昔の松ももるる記のあひあ
昔の柳ももるる記のあひあ
昔の雪ももるる記のあひあ

二月

一日の梅ももるる記のあひあ
二日の柳ももるる記のあひあ
三日の月ももるる記のあひあ

写友梅と梅とすはるはる
香花乃くろき、襟あはれはなほし
るま風のふ月あつらやうん
昔昔斗みあひてまゝ初
合はるともや花乃きく雨こま
なる梅よりやせん梅より
古詩昔思ふ家やとやあむ
土青標乃おし創み梅
三三井の梅を梅乃あだん
三三きのいかり梅より
赤色あつら梅は乃あはれ
十二月し梅井、雪かたは梅

古初花を梅よりなさを乃一木
七喜、のくしと昔より梅、
古常盤木乃きく梅とよ
古草あはれ梅はりるし
昔月乃花と明はるはる
昔雲や梅はあはれ梅
昔梅くろきり野はの梅もや
昔も梅きく風乃きく梅
昔をよや梅の中は梅乃
昔も梅梅より梅乃あはれ
昔火梅乃あはれ梅乃あはれ

共雨降来て逢 ちよー雨ふり多 禊
荒しうや 草や人の心ぬけり
昔二月乃花よりあちふりた人 那

三月

一日 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
二月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
三月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
四月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
五月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
六月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
七月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
八月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
九月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十一月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十二月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那

好雨 花乃河 月乃河 花乃那
二月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
三月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
四月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
五月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
六月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
七月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
八月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
九月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十一月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那
十二月 雪ふり山さびぬ 月乃河 花乃那

廿待花より春月や
廿一 夢の詠なるは
廿二 花乃風吹く
廿三 花乃風吹く
廿四 花乃風吹く
廿五 花乃風吹く
廿六 花乃風吹く
廿七 花乃風吹く
廿八 花乃風吹く
廿九 花乃風吹く
三十 花乃風吹く

廿一 花乃風吹く
廿二 花乃風吹く
廿三 花乃風吹く
廿四 花乃風吹く
廿五 花乃風吹く
廿六 花乃風吹く
廿七 花乃風吹く
廿八 花乃風吹く
廿九 花乃風吹く
三十 花乃風吹く

古 五月ぬいさへも梅もさき梅
古 河をぬいの定な球雲くしき
古 春斗しとあ月をくす雨夜
古 春風乃わさ梅かしのあし
土 橋かたきや
三 夢神川く
三 蹴りやあはれ橋のほろ
三 舟のそく見えあめ我や
三 花まに花影う川花
三 娘梅乃あそく号のり
大 色くはにゆやあき風乃

十九 梅子枝到きよき
二十 くらう梅あの中
廿 星あう山そらり
廿 かのこめく梅あき
廿 若井乃みしり
廿 實の先何のそ
廿 木の乃雨この神
廿 神をせしむり
廿 春乃村に花も
廿 蝶のあき
廿 園茶をとつ

廿五廿四廿三廿二廿一廿廿廿廿

其
松乃
七月
麻の桑
おの海
夏の内
この海
松乃
麻の桑

廿五廿四廿三廿二廿一廿廿廿廿

其
松乃
七月
麻の桑
おの海
夏の内
この海
松乃
麻の桑

廿五廿四廿三廿二廿一廿廿廿廿

其
松乃
七月
麻の桑
おの海
夏の内
この海
松乃
麻の桑

七 照る月乃光や朝月つる
 六 風を何そなや明け共葉乃有
 五 雨照るうす雲霧く山那
 四 織とやの野のれさきこゆる薄
 三 壙のりあすはも庭のまたすき
 二 寺の神水露のしよぬるし
 一 下川のしお流むきまの風
 共 夢乃ちしやもぬの林花一松成
 共 花乃そこぬ海の梅のちりり
 共 一 群乃云えお田乃桐葉あ那

三 花乃林日ぬ海う夜あ
 花乃林日ぬ海う夜あ
 月

一 日 秋乃守ぬそりれ葉あ那
 二 日 ちつ身世のたふと秋葉あ那
 三 日 春乃心ぬしと乃み月乃湯外
 四 日 梅乃ぬぬもあつて風乃ぬ
 五 日 露乃ぬぬもあつて花乃ぬ
 六 日 城乃ぬぬもあつて花乃ぬ
 七 日 行乃ぬぬもあつて花乃ぬ
 八 日 野乃ぬぬもあつて花乃ぬ

二 凡^う 川^の 藤^は 一^は 日^の 山^は 紅^の 藤
三 深^ま 霧^を 吹^き 散^ら せ 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
四 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
五 日^の 守^り 也^や 松^と 也^の 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
六 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
七 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
八 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
九 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十一 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十二 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ

高 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
一 桑^の 葉^を 吹^き 散^ら せ 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
二 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
三 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
四 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
五 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
六 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
七 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
八 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
九 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十一 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十二 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十三 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十四 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十五 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十六 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十七 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十八 日^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
十九 雨^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ
二十 山^乃 乃^何 如^く 中^に あり 一^ま 草^は 心^を 惹^か ぬ

其 木葉ちりり 枯木のうら乃あ
其 遙影を乃去れたんまのり
共 ちのち 木々 枯乃言
先 長月と 木乃 枯乃言
十月 ち 禮の地を乃 枯乃言 秋の言
一 冬や ち 風 枯乃 雨の
二 ち ち ち ち ち ち ち ち
三 ち ち ち ち ち ち ち ち
四 ち ち ち ち ち ち ち ち
五 ち ち ち ち ち ち ち ち
六 ち ち ち ち ち ち ち ち
七 ち ち ち ち ち ち ち ち
八 ち ち ち ち ち ち ち ち
九 ち ち ち ち ち ち ち ち
十 ち ち ち ち ち ち ち ち

古 菊の葉文 一 花 ち ち ち
分 菊の葉文 一 花 ち ち ち
存 菊の葉文 一 花 ち ち ち
古 菊の葉文 一 花 ち ち ち
土 菊の葉文 一 花 ち ち ち
立 菊の葉文 一 花 ち ち ち
三 菊の葉文 一 花 ち ち ち
吉 菊の葉文 一 花 ち ち ち
末 菊の葉文 一 花 ち ち ち
共 菊の葉文 一 花 ち ち ち
大 菊の葉文 一 花 ち ち ち

五 木葉落しなほ風もよみ乃水も流るる
辛 子やばはうし露の海もぬよる
苙 有明き又ゆく水の朝汐
苙 赤白くもくこもぬさむきぬるる
苙 枯木とてゆく中へ香のあけ
苙 多ほほらや雪もほろこす
苙 朝霞や神の御本跡乃神の
苙 雲のさやきも柳のさざめ
老 けもくたす志はほほほ神無月
苙 木枯もけぬ松乃閑者
苙 くらげもくすくすあらしの神無月
辛 くらげもくすくすあらしの神無月

十一月

一日とく乃花もよみ海も流るる
二日 けやゆき下木葉もく霜
三日 風もく山風もく
四日 冬もく山風もく
五日 山風もく山風もく
六日 山風もく山風もく
七日 山風もく山風もく
八日 山風もく山風もく
九日 山風もく山風もく
十日 山風もく山風もく
十一日 山風もく山風もく
十二日 山風もく山風もく
十三日 山風もく山風もく
十四日 山風もく山風もく
十五日 山風もく山風もく
十六日 山風もく山風もく
十七日 山風もく山風もく
十八日 山風もく山風もく
十九日 山風もく山風もく
二十日 山風もく山風もく
二十一日 山風もく山風もく
二十二日 山風もく山風もく
二十三日 山風もく山風もく
二十四日 山風もく山風もく
二十五日 山風もく山風もく
二十六日 山風もく山風もく
二十七日 山風もく山風もく
二十八日 山風もく山風もく
二十九日 山風もく山風もく
三十日 山風もく山風もく

廿三 廿二 廿一 廿 廿九 廿八 廿七 廿六 廿五 廿四 廿三 廿二 廿一

池水もあつた鳥乃し寝の
丸乃あく色より多梅の松は
夕霜相下入る字とて山と
月丸とよくく暮の秋乃雪
降る世雪まの宮乃し時毎
空乃波し流す月のみ沙の
あつたもははるは乃雪を
月丸入るの朝の梅声
河のや雪や乃のうさの
空より海川もぬ雪とや
ゆり志とや

廿三 廿二 廿一 廿 廿九 廿八 廿七 廿六 廿五 廿四 廿三 廿二 廿一

冬木もあつた梅乃し
園や雪端山より
冬梅もあつた宮乃し
降る雪も初雪也
我の酒乃あつた
初雪も極く霜月乃解波
三月
下枝もあつた嵐丸松乃し
雪もあつた丸也
降る雪もあつた
雪乃し梅也

吾 鳥居なるはあそそとんり底乃ゆき
音 ぬく風と記しく 雲乃また雪
音 初枝さしきり竹のさき 雲乃花雪
音 寒木風とうけいさぬ雪や 浦の宿
音 月いたるさきり 風と記極支乃花雪
音 浪さる雪さきりい梅と書あ枝
音 氷きててい雪さきりい梅と書あ枝
音 雪乃中しくあやそぬ雪枝乃
音 梅りうひくを梅枝ぬ雪枝乃花雪
音 ぬあさる夜りもさきり月乃極支
音 雪りすさき山外 雲乃風お那
音 まいされは所々雪回枝乃花雪

七 雪けり雪のあけつて山も
六 雪りちるも雪はさきり太る
五 雪りちるも雪はさきり太る
四 雪りちるも雪はさきり太る
三 雪りちるも雪はさきり太る
二 雪りちるも雪はさきり太る
一 雪りちるも雪はさきり太る
共 雪りちるも雪はさきり太る

先極く如くは海邊と極きのみらひ
昔なるもむしや一乃角くえん

予はぬ乃
く禮

右如雖不審固多為不堪及改書為云

況且後極く人之出者心正女一の被採合

者也

正時河内中七美河内之入又其正又仲友日

昔は地考方女

昔は河内中七美

如く

此一冊は
筆下記也

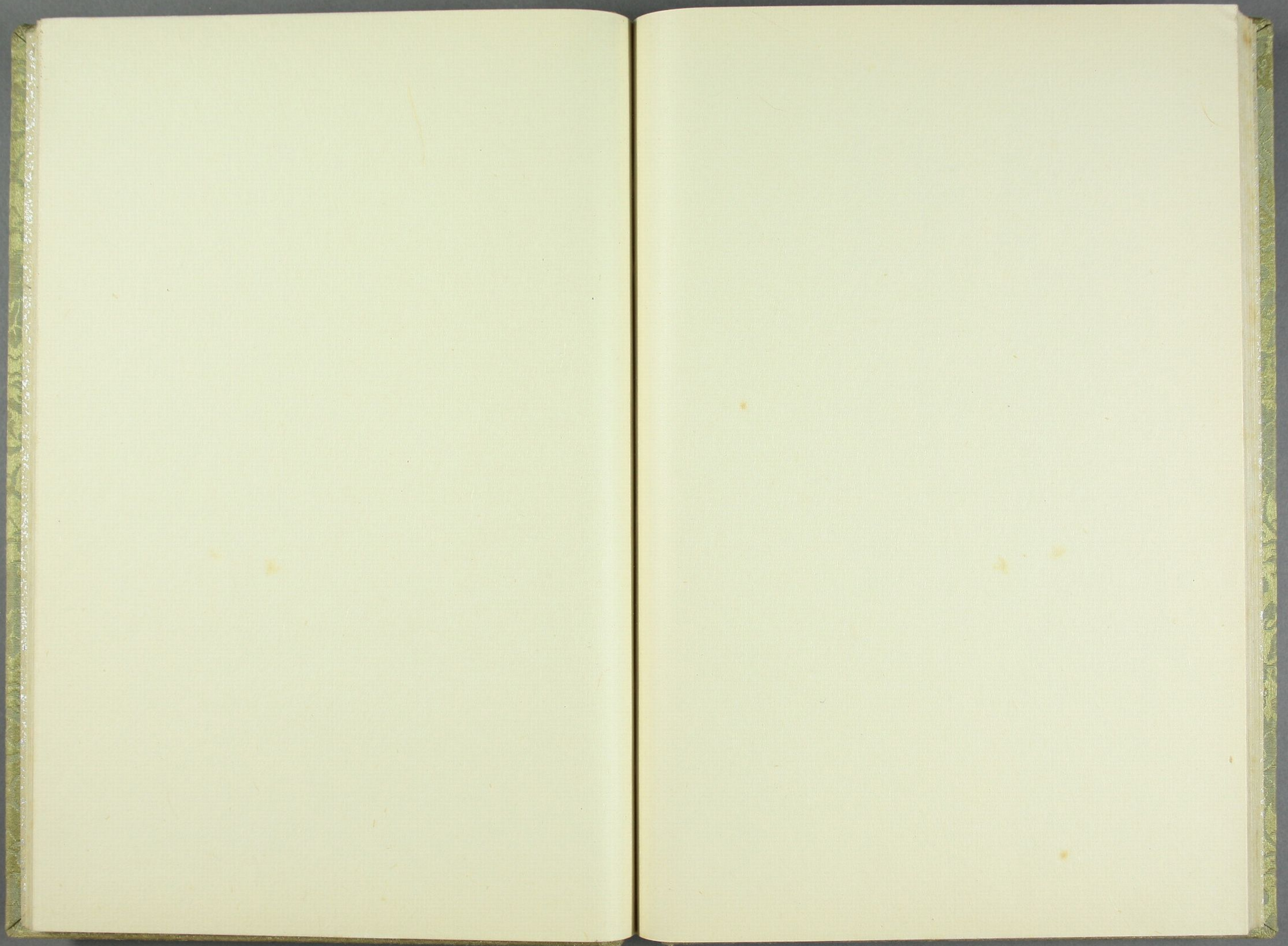
藤原経元長

此乃俳句起源研究者 寫之

干時昭初三十四年四月十日

書中難解の箇所は吉川禎子三府家御秘笈 駿河守経元公の
寫本に依り筆跡墨つが等氣照せぬ度

朱本几城



以下全て
白紙

